



松 浦 利 作 さ ん 屈 足 西 1 線 27 号 在 住
87 歳 (明 治 29 年 生)

昭和57年2月14日に訪問 若原幸雄

私は、明治29年、岐阜県揖斐郡大野村で生れ、明治39年、11歳の時父母兄弟と共に、船で釧路に着き汽車で帯広の伏古（今の西帯広）に入植。翌年の春、馬櫓に送られて現在地に転住しました。

当時はしばれが厳しくて、堅雪の上を馬で歩くこともできた程だ。当時の状況は、こくわぶどうのつるの絡む樹林地と、背丈けの草原の未開地だった。開墾の火入れに支障になるような人家なく、ふとんや身回品は手軽にまとめて場所を替える。朝佐幌の方から火を放てば、夕方十勝川辺まで一望できる広い面積が焼き払われた。

既に道路号線は、見通せなかったが測量はほぼ完了し、土地は一戸分5町歩として5円位で払下げを受けた。

入植の最初はおがみ小屋、草ぶきが普通で、タモの木皮屋根の掘立の家は上等の方だった。茅の草壁でふとんの上に吹雪が吹きこみ、箕ですてることもあった。灯りはたいていろいろですまし、石油は全く貴重品で年間4合ビン（正中の空ビン）1本で過し、その代金は10銭位だった。

アイヌの人達はほとんどいなく、ときおり物々交換に現われ私どもから、いなきび1升、むこうからは、あきあじ3～4本で取引された。

作物は、いなきび、トーキビ、薯、南瓜で次第に小豆、麦も作りそれを主食とした。麦の脱穀は焼穂式で、残り火のため一夜に麦の山を灰にした人もあった。唐竿（カラサオ）は明治の末に出始め、1本6銭。トーキビは反収4俵位とれ、いなきびとトーキビの粥、南瓜、薯が主食で、いなきびと小豆のお粥は上等のごちそう。酒類は正中しかなく、4合ビン1本6銭だった。

収入は、開墾の出面、橋架け、測量人夫等仕事はいくらでもあって、1日の賃金は50銭位。

屈足も次第に拓け、大正8年頃からの馬鉄による枕木（タモ、桂、しころ、せん）運搬、岩松～新得駅土場間、強い馬で20石積み10円になり、冬道の馬櫓運搬で枕木1挺当り10銭。新得駅土場は枕木で埋まり積出し風量は壮観であった。

農作物取引は、新得駅前の重田が全盛を極め、そこの大帖場をしていた岡田の油屋も栄えた。

馬は、種牡馬で50円、良い馬25円位で、飲食店で1杯気嫌でばくったこともある。

若い者の、ひと旗組を除いては、永住の目的で働き通して、入植後5年くらいまで大へんだったが、その後まあまあの落つきができてきた。

医者は植村さん一軒だけ。お産は産婆さんもなく、お互いの助け合いか、自宅だけでお産した。

特殊産業として、柏の木の皮からシブが採れ、特に根に良質のものが有り、止若の新田ベニヤへ売れたものである。

私の生れた所は、今の岐阜県大野町西相羽の西山の村落だが、特に故郷を訪ねる心なく、今の屈足に愛着を感じる。永い年月懸命に生き、松浦家の本家を継ぎ、現在老境に入り病を得るも家族の看護により小康状態にあり、今日過ぎし日をふり返り、思い新たである。